

非認知能力からみた連続・非連続的発達変化の両面性について

— 知情意からの検討 —

坪井 寿子

Both sides of the continuous and discontinuous developmental change in noncognitive abilities

— Consideration on the intellect, emotion and volition —

Hisako Tsuboi

要 旨

本稿では、発達の変化における連続・非連続の両面性について非認知能力を中心に考察した。非認知能力では、人の発達・成長において重要な側面を持っていることが示されている。ただ、その概念はあいまいで全体像がつかみにくいことも指摘されている。そこで、次の2点について検討することにした。1点目は、非認知能力は文字通り知情意の中の「情」及び「意」の側面が基本となるが、実際にはその多くは「知」の側面もかかわっていると考えられる。このことから、知情意の面から非認知能力について改めて検討することにする。2点目は非認知能力では、教育や介入の効果をはじめ変容可能性について検討されている。非認知能力の中には比較的変容しやすい面と変容が難しい面があると考えられる。この問題について、発達の変化の連続・非連続的变化の面から検討していくことにする。さらに、これらの非認知能力について、心理的実践の主要分野である保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の5つの分野においてどのようなアプローチが可能なのか検討した。

キーワード：非認知能力、知情意、発達の変化、連続・非連続の両面性、心理的支援

1. はじめに

これまでいくつかの研究を通して、発達の変化における連続・非連続的变化において心理的実践も含めて検討してきた(坪井 2019、2021a、b)。まず、発達特性に応じた支援と切れ目のない支援とについては、一見すると相反する傾向に映るが、双方とも大切な視点であり、これらを両立させることが心理的支援を考える上では重要となる。さらに子どもから大人になることへの難しさの面からの検討や、子どもから大人への発達過程のみならず生涯発達過程において検討してきた。これらは生き

づらい現代社会においては重要な課題と言える。本稿では、このような現代社会で生きることにおける非認知能力の働きについて考えていく。非認知能力については、これまで教育や介入効果など発達プロセスに関する検討もなされてきているため、これまで検討してきた発達の変化に関する研究結果も踏まえて検討していくことにする。

非認知能力については、周知の通り近年盛んに取り上げられてきているが、ヘックマン J. による経済的側面からの幼児教育の影響に関する検討によるところが大きい(ヘックマン J. 2015)。従来の認知能力のみならず、非認知能力(社会的情緒能力

と表現されることもある)について議論され、経済協力開発機構(OECD)(2018)においてもその重要性が指摘されている。このような経緯からも非認知能力について発達的变化の面から検討することが求められている。本稿では代表的な非認知能力について取り上げていくが、実際には現時点での代表的な非認知能力に関する成書とされている小塩(2021)に基づいて検討を進めていく。その前に、本稿で取り上げる2つの観点である「非認知能力と知情意の働き」及び「非認知能力と発達的变化」の問題について少し述べていく。

2. 非認知能力と知情意の働き

まず、1点目の問題として、非認知能力について心の働き全体として知情意の面から考えていく。

現代の心理学は、その成立背景から西欧思想の影響を受けていると考えられる。古くはギリシア哲学の段階から、心の働きを「認識(知)・感情(情)・欲望(意)」もしくは「認識・情意」機能と分けてとらえられることが多かった。認識機能については人間特有の理性が伴っており、情意機能については動物も含め本能的なものが関連しており、前者の方が優れているとの価値観が伴っていた。このような背景は心理学の成立背景にも影響しているが、実際に現代までの心理学の流れを振り返ると、いわゆる非認知能力についても古くからその重要性は指摘されていた。ただ、測定方法をはじめ客観的な立証が難しかったことが言える(遠藤2017)。

このような形で認知・非認知について考えると、認知は認識機能、非認知は情意機能にほぼ対応していると考えられる。それぞれの把握の仕方ということに注意を向けると、認識機能は能力系ともいわれ、次元上にある最大パフォーマンス上に示されることが多い。これに対し、情意機能については、特性として両極性をもつ典型・平均的なパフォーマンスとしてとらえられることが多い。それぞれの特性ということから考えると、非認知能力は社会的情緒能力と表現されることもあるが、実際

には知的な側面も多くみられる。このような観点から、知情意の面から非認知能力を検討することにする。

3. 非認知能力と発達的变化

次に、2点目の問題として、非認知能力については、教育や介入の効果をはじめ変容可能性について指摘されていることを受け、これまでの研究結果も踏まえながら発達的变化の面から考えていく。実際には、非認知能力の中には比較的変容しやすい面と変容が難しい面があると考えられる。この問題について、連続・非連続の発達的变化の面から検討していくことにする。発達的变化における連続・非連続の問題については、発達メカニズムの解明のためにしばしば取り上げられている(例えば、加藤2007、木下2017、やまだ2011、矢野1999)。この場合、時間の流れの中における一人の人間としての発達プロセスなのだから連続的变化ととらえられることもあるかもしれないが、発達的变化を含む種々の発達現象は連続的にも非連続的にもみることができ、どちらを重視するかは「観点」の置き方による。どちらかにより重きを置くことはあっても、どちらか一方のみが正しいとは言い難く、発達的变化における連続・非連続については、その両面性、あるいは同時に視野に入れてとらえることが求められる。

前述の通り、非認知能力についての最近での検討はその経緯の事情から、望ましい変化に向けてといったことが検討されることが多い。そこで、この発達的变化について、発達の方向性、変容のしやすさ、望ましい変化というのがどの程度存在しているのだろうか、といった問題についても検討していく。実際には、教育・介入を含めた変容可能性といった面も含めて発達的变化における連続・非連続の両面性について検討していくことにする。

4. 代表的な非認知能力について

そこで、さきに述べた小塩(2021)を基に代表的な非認知能力について検討していく。具体的に

は、「誠実性」「グリッド」「自己制御・自己コントロール（以下：自己制御とする）」「好奇心」「批判的思考」「楽観性」「時間的展望」「情動知能」「感情調整」「共感性」「自尊感情」「セルフ・コンパッション」「マインドフルネス」「レジリエンス」「エゴ・レジリエンス」である。前述の通り、非認知能力の概念はかなり曖昧であるので上記以外にもいくつか挙げられるが、現段階では1つの目安とさえよう。以下、それぞれについて、概要を示したうえで、「知情意の働き」や「発達的变化（発達の変容の可能性）」との関連について述べていく。

(1) 誠実性

誠実性とは、課題にしっかりと取り組むパーソナリティを表し、自身の衝動を社会の規範に沿って適切にコントロールし、課題指向的かつ目的指向的な行動をとる傾向とされている。誠実性の高い人は、規則正しい、計画的、責任感が強い傾向と言える。知情意については、「情」「意」の側面が比較的大きいと言え、価値観もかかわってくる。発達の変容の可能性については、乳幼児期から青年期前期までは誠実性が低くなる傾向がみられ、青年期以降から老年期までは高くなる傾向にあると言える。

(2) グリッド

グリッドとは、困難な目標への情熱と粘り強さを表し、困難や失敗にもかかわらず、長期目標に対して示す「情熱」と「粘り強さ」等とされている。誠実性や自己制御との関連も深い。「努力の粘り強さ」「興味の一貫性」の2つの側面がある。知情意については、情意の「意」の部分に特に関連が深いと言える。発達の変容の可能性については、グリッドの特性が高いとさまざまな課題への効果が効率的であるとされている。これは努力の「量」「質」から言われており、自分で学び進める自己調整学習とも関連し、子どもの「達成したい・達成できる」気持ちをも反映している。

(3) 自己制御

自己制御とは、目標の達成に向けて自分を律する力を表し、個人的な目標や社会的な目標に沿って、自己の認知・感情・行動を制御するプロセスとされている。誠実性やグリッドとの関連も高く、衝動性と関連させて満足遅延の面から検討されることもある。知情意については、情意の「意」の部分が高いと言える。発達の変容の可能性については、社会場面での自己制御などもあり、実践的な試みも行われている。情動知能や感情調整とともに感情に対処する能力として位置づけられている。

(4) 好奇心

好奇心とは、新たな知識や経験を探求する原動力を表し、内発的動機づけとの関連が深い。知情意については、知的好奇心に基づく「知」の側面の他に、予期しない状況に対する不調和感や戸惑いに関する「情」の側面、その一方で適度な情報のズレが好奇心の方向性につながっていき「意」の側面とも関連がある。発達の変容については、上記の適度な情報のズレを活用した試みとして、学校教育場面での理科教科の仮説実験授業を通して展開される例もある。

(5) 批判的思考

批判的思考とは、情報を適切に読み解き活用する思考力を表し、思考や行為の方針を決定する際の合理的で反省的な思考とされている。自身の法や道徳意識が関連している。知情意については、ここで取り上げている非認知能力の中ではかなり「知」の側面のウェイトが大きいと言える。また、志向性や信念など「意」との関連も深い。発達の変容の可能性については、自ら情報を参照して発信、リテラシー能力を伸ばす等の試みもなされている。また、思春期に自尊感情が低下するのは批判的思考の発達が要因の1つともいわれている。

(6) 楽観性

楽観性とは、将来をポジティブにみて柔軟に対処する力を表し、ポジティブ心理学の中核に位置づけられている。知情意については、粘り強い目標追及は「意」の側面に、柔軟な目標調整は「知」の側面に関連していると言える。発達の変容の可能性については、こうなりたい自己の理想像を考えることが楽観性を伸ばすことにつながる（学習性楽観主義）。特に、変化可能な状況と不可能な状況での取り組み方の違いについて大きくかかわっている。また、楽観性については比較的安定している特性としてとらえることもあり、レジリエンスなど適応性との関連もみられる。

(7) 時間的展望

時間的展望とは、過去・現在・未来を関連づけてとらえるスキルを表し、個人の心理的な過去・現在・未来の相互関連から生み出されてくる感情とされている。知情意については、「欲求（動機）→認知→感情（評価）」のプロセスからとらえられることもあり、「知」「情」「意」の各側面がかかわってくる。発達の変容の可能性については、時間的連続性の問題がかかわってくる。子どもや若者は、今という時間と過去や未来とを体験的に連続してとらえることが難しい。その場合には、実現可能性（現在との結びつき）についての判断を伴った「予期」ではなく、将来についての漠然とした「空想」ととらえていることになる。

(8) 情動知能

情動知能とは、情動を賢く活用する力を表し、自己と他者の感情および情動を認識して区別し、思考や行動に活かす能力とされている。知情意については、「知」と「情」とを直接統合している概念とも言える。また、狭義の「知能」への批判から提起された概念であるが、実際には知能の部分も少なくない。発達の変容の可能性については、日本では就学前児から高校生に幅広く用いられている「社会性と情動の学習（SEL）」が行われてお

り、成果も上げている。さらに看護師を対象とした成人対象の情動知能のトレーニングもなされている。

(9) 感情調整

感情調整とは、感情にうまく対処する力を表し、人が、いつ・どのような状況で、どのような感情を経験したり、表出したりするかに影響する一連の過程とされている。知情意については、感情調整のため「情」の側面が中心となるが、感情状態に対してうまく対処する能力が必要なため「知」の側面も関連してくる。発達の変容の可能性については、感情調整に関する就学に向けての教育も行われ、学校段階間の円滑な接続も目指されている。具体的には、幼児期には基礎的な言語と感情理解との関係の理解、児童期においては感情を調整する能力の発達などが検討されている。

(10) 共感性

共感性とは、他者の気持ちを共有し、理解する心理特性を表し、他者の状況や気持ちに目を向け、気持ちを共有したり、理解したりする特性のこととされている。知情意については、感情的共感（感情の共有・向社会的関心）と認知的共感（感情の理解）があり、双方が深くかかわっている。共感性のため基本的には「情」の問題になるが、役割取得など「知」の側面も多分に備わっている。発達の変容の可能性については、乳幼児期においては親自身の共感性や働きかけが影響する。児童期についても登場人物の感情理解や表情理解などのアプローチがなされている。

(11) 自尊感情

自尊感情とは、自分自身を価値ある存在だと思う心を表し、自己に対して肯定的な態度とされている。多面的な側面もあり、自己受容、自己不一致理論からも検討されている。知情意については、「情」の側面が主であるが、価値観もかかわることから「意」の側面もみられる。また、種々の調整

方略も関連することから「知」の側面も無関係ではない。発達的変容の可能性については、多次元性による緩衝作用、変動性による回復、本来性による均衡化の3側面からとらえているが、特に、変動性による回復が直接的に検討されていると言える。

(12) セルフ・コンパッション

セルフ・コンパッションとは、自分自身を受け入れて優しい気持ちを向ける力を表し、失敗や傷ついた経験の後に、自分の感情をバランスよく受入れられるとされている。そして、その経験が他者の人たちとも共通していることを認識し、自分に優しい気持ちを向けることとされている。知情意については、「意」の側面がかなり強くみられ、感情や認識の面も関連がある傾向となる。発達的変容の可能性については、青年期のメンタルヘルスとの関連もあり、意欲が低下した場合のサポートなどが重要となる。自尊感情は評価に依存されるが、セルフ・コンパッションは依存されないとされている。

(13) マインドフルネス

マインドフルネスとは、「今ここ」に注意を向けて受け入れる力を表し、今ここでの経験に評価や判断を加えることなく、能動的な注意を向けることとされている。そこには判断や評価をしないことが特徴となる。知情意については、「情」「意」の側面が中心となるが、自身の心身の状況をどのようにとらえるかも関係してくるので、その点では「知」の側面もかかわってくる。発達的変容の可能性については、青少年を対象とした教育的マインドフルネスも比較的多く行われており、具体的に小学生から高校生を対象としたウェルビーイングや心理的健康など適応性を目指した取り組みもある。

(14) レジリエンス

レジリエンスとは、逆境にしなやかに生き延びる力を表し、過酷な環境やストレスフルな状況、あるいはトラウマ体験といった逆境に直面した際に、そ

のショックから回復し、状況への適応を示している。知情意については、「情」の側面を基本としつつ、意志の面である「意」の側面も大きく、状況把握という面では「知」の側面もみられる。発達的変容の可能性については、レジリエンスの獲得的要因である問題解決志向、自己や他者の理解などから検討されている。レジリエンスは、状況によって大きく変化し、個人差も大きいので、個々のおかれた状況によって考える必要がある。

(15) エゴ・レジリエンス

エゴ・レジリエンスとは、日常生活のストレスに柔軟に対応する力を表し、日常生活における内的あるいは外的なストレスに対して柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し、適応できる力、自我の調整能力とされている。エゴ・レジリエンスについては、柔軟性、好奇心、立ち直り力の側面があるとされている。「知」「情」「意」の面からは、レジリエンスと同様3つの側面ともにかかわってくると思われる。発達的変容の可能性については、自己抑制や愛着との関連も深く、幼少期の母子関係の愛着も関連している。さらに、生涯を通して、特に高校生までは比較的安定していると言われている。生涯発達でのウェルビーイング（心理的幸福感）とも関連が深い。

5. 非認知能力からみた心理的支援

これまでの一連の研究（坪井 2019、坪井 2021a、b）では、連続・非連続の発達の変化において心理的実践の場においてどのようなことが考えられるかについて検討してきた。今回はこの現代社会での生きづらさにおいて非認知能力について検討し、これまでと同様、心理的支援からも考えていくことにする。心理的支援についてはさまざまな分野があり、今回も保健医療分野、福祉分野、教育分野、司法・犯罪分野、産業・労働分野について取り上げることとする。これらの分野は心理職の国家資格である公認心理師においても主要な分野と位置づけられているものである。

具体的には、それぞれの分野の概要を述べた後、各分野における非認知能力の問題がどのようにかわってくるのか、知情意や発達的变化の問題とも関連させながら考えていくことにする。各分野の心理的支援の概要については、津川・江口（2019）、片岡・米田（2019）、増田（2019）、生島（2019）、平木・松本（2019）、公認心理師協会（2021）等を参考にまとめた。

併せて、先に挙げた15の非認知能力の特性、すなわち「誠実性」「グリッド」「自己制御」「好奇心」「批判的思考」「楽観性」「時間的展望」「情動知能」「感情調整」「共感性」「自尊感情」「セルフ・コンパッション」「マインドフルネス」「レジリエンス」「エゴ・レジリエンス」からも検討していく。実際にはこれらの非認知能力がそれぞれ多かれ少なかれ関連がありつつもより深くかかわっているものを中心に検討していく。

(1) 保健医療分野における非認知能力の問題

保健医療分野については、主に病に罹った人への治療の営みである医療分野と、病に罹らないよう予防を含め健康を保つ営みである保健分野とからなっている。さきに挙げた非認知能力の中でも「共感性」「マインドフルネス」「セルフ・コンパッション」との関連性が比較的深いとされている。

知情意については、例えば保健医療場面では自身の心身の理解のされ方が大きく影響することが多い。これについて、自身に対する理解としては「知」の側面となるが、そこには「情」の側面が大きく揺らいでくることも少なくない。また、自身の心身であるがゆえにその方向性が強く作用することもあり、その意味で「意」の側面の影響もみられる。

発達の連続・非連続の問題について、生涯発達の面からも、子どもから大人になるにあたっての問題についても、自身の心と身体の状態をどのようにとらえるのかは大きな問題と言える。

(2) 福祉分野における非認知能力の問題

福祉については、一人ひとりにとってより豊かな生活を送ることができるための方策に焦点が当てられている。福祉分野については、人々は生活の豊かさや幸福のために自ら努力していくが、さまざまな事情のために自力ではそれを実行できない状況に対して、そのような人たちの生活の豊かさや幸福を支援していく分野と言える。家族や地域社会に関する分野とも言える。さきに挙げた非認知能力の中でも「感情調整」「共感性」との関連性が比較的深いとされている。

知情意については、例えば高齢者の認知症問題については「認知症」のため主要な症状は「知」の側面だが、特に症状の行動面に関しては「情」「意」も深くかかわってくる。

発達の連続・非連続の問題については子どもから大人への移行についての児童福祉の位置づけも福祉分野では大きな問題となる。

(3) 教育分野における非認知能力の問題

教育分野については、主に子ども達の学習面や行動面に関する理解と支援を基に学校教育の問題が中心となる。現代社会における学校を取り巻く問題の難しさに対して、例えばチーム学校としてのアプローチに非認知能力がどのようにかわるのかが問題となってくる。さきに挙げた非認知能力の中でも「好奇心」「批判的思考」との関連性が比較的深いとされている。

知情意については、これまでは、学習面では「知」の側面、行動面については「情」「意」の側面から取り上げられてきたが、学習における動機づけの問題をはじめ、両者は密接にかかわっており、知情意全体から取り組む必要がある。

発達の連続・非連続の問題については、学校教育場面が中心となるので、子どもから大人に向けての変化が主要な問題となっていく。

(4) 司法・犯罪分野における非認知能力の問題

司法・犯罪分野では、犯罪や非行の問題の他に、司法場面における（家庭）裁判所での家事事件などもその対象となる。さきに挙げた非認知能力の中でも「自己制御」「マインドフルネス」「レジリエンス」「共感性」「自己制御」「感情調整」「情動知能」との関連性が比較的深いとされている。

知情意については、上記の非認知能力ともかかわるが、社会生活を送るために必要とされる諸機能を非認知能力の面から考えていく際に、「情」「意」の側面とともに「知」の側面からのアプローチも必要になってくる。道徳性との関連も深く、その面からも「知」「情」「意」の各側面から検討することが必要となる。

発達の連続・非連続の問題については、青少年の育成などから、子どもから大人にむけての問題が主なものとなる。

(5) 産業・労働分野における非認知能力の問題

産業・労働分野については「働くこと」への心理的支援が基本的な問題となる。産業領域では、主に組織内外の健康管理・相談、労働領域では障害者を含む就労支援やキャリア支援などが対象となる。さきに挙げた非認知能力の中でも「レジリエンス」「エゴ・レジリエンス」との関連性が比較的深いとされている。

知情意については、自身の職業やキャリアに対する理解は「知」の側面となるが、そこには「情」の側面もかかわるし、目標に向かってという方向性からすると「意」の側面ともかかわってくる。

発達の連続・非連続の問題については、大人になることと職に就くことの意味、あるいは生涯発達における職の継続や新たな職への移行などについて考えていく必要がある。

6. おわりに

以上の検討を受けて、まとめと今後の課題について簡単に述べる。

まず、「非認知能力と知情意の働き」については、

非認知能力（「情」「意」）でありながら知の側面もみられ、「知」「情」「意」が関連しあっていることが示された。非認知能力の概念の持つ難しさでもあるが、むしろ分離して考えることに無理があるのかもしれない。また、「非認知能力と発達的变化」については、主な非認知能力との関連については検討できたが、連続・非連続的变化まで踏み込むことはできなかった。今後は教育や介入の効果も含めて学習と発達の問題と関係させて考えていくことも必要かもしれない（例えば、坪井 2009）。

さらに、心理的支援の5つの分野についても上記の問題について検討したが、非認知能力が関わっていることは示されたが、具体的な検討には及ばなかった。

これらの検討課題とともに、今後はこの知情意と発達的变化の問題が互いにどのような形で相互にかかわっていくのかについても検討していきたい。現代社会では生きづらい面も多いため、本稿で検討したことを基に非認知能力についてさらに深く考えていきたい。

7. 文献

- 麻生武・加藤義信 (2011). 発達段階論の過去・現在・未来 発達心理学研究 22 335-338.
- 遠藤利彦 (2017). 非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書 国立教育政策研究所.
- ヘックマン J. (2015). 幼児教育の経済学 古草秀子（訳）東洋経済新報社.
- 平木典子・松本桂樹（編）(2019). 産業・労働分野 理論と支援の展開 創元社.
- 本郷一夫 (2017). 生涯にわたる発達をとらえる 山崎晃藤崎春代（編著）臨床発達心理学の基礎 第1章 2-24 ミネルヴァ書房.
- 生島浩 (2019)（編）. 司法・犯罪分野理論と支援の展開 創元社
- 柏木恵子 (1972). 発達期と発達段階 藤永保（編）児童心理学 第2章 53-94 有斐閣.
- 片岡玲子・米田弘枝（編）(2019). 福祉分野 理論と支援の展開 創元社.
- 加藤義信 (2007). 発達の連続性 vs. 非連続性の議論からみた表象発生の問題 心理科学 27 43-58.
- 経済協力開発機構（OECD）(著) (2018). 社会情動的スキ

- ル——学びに向かう力 無藤隆・秋田喜代美（監訳）明石書店。
- 木下孝司（2017）. 生涯発達をとらえる基礎理論 山崎晃・藤崎春代（編著）臨床発達心理学の基礎 25-47 ミネルヴァ書房。
- 公認心理師協会（2021）. 公認心理師の活動状況等に関する調査 厚生労働省（令和2年度障害者総合福祉推進事業）.
- 子安増生（2011）. 心の発達の時間 子安増生 白井利明（編）時間と人間 発達科学ハンドブック3 1-15 新曜社。
- 増田健太郎（編）（2019）. 教育分野 理論と支援の展開 創元社。
- 日本生涯学習総合研究所（2018）. 「非認知能力」の概念に関する考察 日本生涯学習総合研究所。
- 日本生涯学習総合研究所（2020）. 「非認知能力」の概念に関する考察（Ⅱ）——「非認知能力」の要素における関連性の観点から 改訂版 日本生涯学習総合研究所。
- 鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ（2016）. 生涯発達心理学 有斐閣アルマ。
- 坪井寿子（2009）. 子どもの学習と思考 東京未来大学通信教育課程教材。
- 坪井寿子（2019）. 発達的变化における連続・非連続の両面性に関する検討——発達時期に応じた支援と切れ目のない支援とに関連させて——
- 未来の保育と教育——東京未来大学保育・教職センター紀要——第6号 123-130.
- 坪井寿子（2021a）. 連続・非連続的变化の両面性からみた大人になることの難しさについて——主要な心理的支援の分野からの検討——未来の保育と教育——東京未来大学保育・教職センター紀要——第7号 59-68.
- 坪井寿子（2021b）. 生涯発達からみた連続・非連続的变化の両面性について——獲得と喪失からの検討——未来の保育と教育——東京未来大学保育・教職センター紀要——第8号 69-76.
- 津川律子・江口昌克（編）（2019）. 保健医療分野 理論と支援の展開 創元社。
- やまだようこ（2011）. 「発達」と「発達段階」を問う：生涯発達とナラティブ論の視点から 発達心理学研究 22 418-427.
- 山崎晃・藤崎春代（編）（2017）. 臨床発達心理学の基礎 ミネルヴァ書房。
- 矢野喜夫（1995）. 発達概念の再検討 無藤隆 やまだようこ（編）生涯発達心理学とは何か——理論と方法 第3章 37-56 金子書房。

（つばい ひさこ）東京未来大学こども心理学部